

# ケベック社会の現在—世俗化と少子化\*—

中野 秀一郎

## はじめに

本稿の目的は、1960年代初頭の「静かなる革命」以来劇的な社会変化を経験したケベック社会の現在を、<世俗化>と<少子化>という角度から検討することである。周知の通り、ケベック社会ではカトリック教会が長い間人々の日常生活を主導し、またその信仰が Quebec Nationalism の原点を構成してきた。そのことがケベック近代化の進展を著しく妨げる結果になったとしても、もしカトリック教会がなければケベック社会は現在のような形でこの北アメリカの地に存続できたかどうかは疑問である。しかし、1960年に州政権を掌握したケベック自由党のルサージュ政権以来、歴代の政権（世俗的権力）はケベック社会の近代化を<上からの改革>で強力に押し進めた。それまで、教育、福祉、医療の領域で大きな力を持っていたカトリック教会はその実行力と影響力を大幅に喪失し、それとともに人々の教会離れが進行した。カトリック的教義にもとづく価値、規範、道徳から自由になった人々の社会行動は従前のものとは大きく様変わりし、その結果家族を含む社会構造が顕著に変動したのである。（分析図式参照）

さて、北アメリカのアングロ系の海の中で、フランス系ケベック社会が生き延びえた一つの原因は、その人口の維持であった。それも、周辺アングロ系社会が移民の流入によってその人口を維持、あるいは増加させたのとは違って、ケベック社会はただひたすらに自己再生産によってその目的を遂行したのである。（「揺り籠による復讐」

### 分析図式

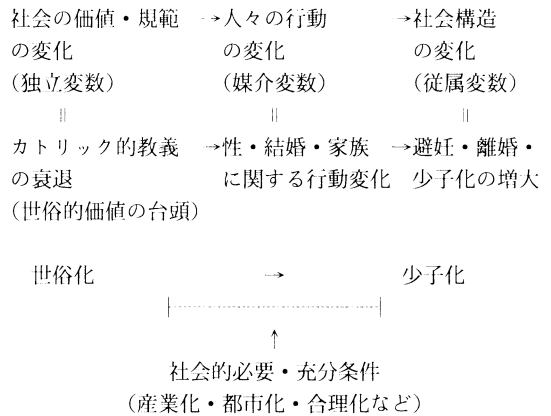
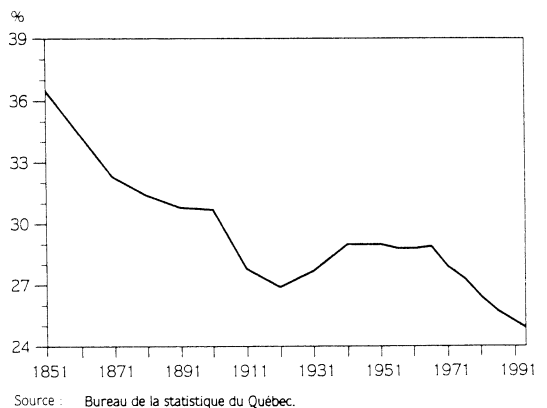


表1 Part relative de la population du Québec, Canada, 1851-1994



la revanche des berceaux) 並外れて高い出生率、それがケベック社会の生存の鍵であったのだ。ところが、近代化（世俗化）の進展は、今度は並外れて低い出生率をもたらしたのである。この人口の相対的な減少は（表1）、ケベック人に

\*キーワード：ケベック、世俗化、家族

nation の〈存続〉に対する危機感を呼び起こすものであった。こうして、人口問題は政治 (nationalism) と密接に結びついたのである。

以下に、この間の事情を統計的なデータに基づいて検討し、併せて世俗化と(相対的)人口減少との関係を仮説的に議論してみたい。

### ケベック社会とカトリズム： 歴史的回顧

最初に、カナダにおけるケベックの宗教人口的「位置」について確認しておこう。(表2) 周知の通り、カナダにおける最大の宗教集団はローマ・カトリック教徒(全人口の47.3%, 1981年)であるが、特にケベック州では、かれらが人口の88.2%を占め、文字通りケベック社会はカトリック社会であるといっても過言ではない。さらに、ケベック州におけるローマ・カトリックの優位(人口比)はその歴史的発展過程と不可分に結びついており、歴史を顧みずして、フランス系カナダにおけるカトリック教会の今日の重要性を理解し、いわんやこれを評価することは不可能である。この社会は建設当初よりカトリック聖職層により完全に浸透され、支配されてきたからである。従って、

その歴史はあらゆる点でカナダ・カトリシズムの歴史と融合しているのである。その上、フランス系カナダ人(ケベック人)は、いわばフランス人であり、カトリックである>という自己規定のもとにアングロサクソン・プロテスタントが優位を占めるこの北アメリカ大陸で生き残ってきたというのであるから、なにかんずく教会の役割はその精神的支柱として決定的に重要であったと思われる。<sup>1)</sup>

実際、歴史的にみても、ケベック・カトリシズムは世俗社会に対するほぼ完全な〈支配〉を確立していた。だから、20世紀に入って近代化・産業化の波が押し寄せると、教会はこれに抗して新しい Social Doctrine を用意して、民衆の教化に努めた。特に、the Jesuits が活発で、教育や政治に積極的に取り組み、かの union nationale にさえ影響を持っていたほどである。神父の多くが政治や労働組合や教育の指導に従事したので、教区での日常活動に支障を来す程であったが、それが大事に至らなかったのは聖職者の数もまた増え続けたからであった。<sup>2)</sup> (1890年、2091人；1020年、3263人；1940年、5000人)

こうした伝統的なカトリシズムが支配したケベック社会は、多くの歴史家によってさまざまに

表2 Religious Affiliation: Percentage of Total Population  
(Source: derived from Statistics Canada, 1981 census)

	Christian:							No	
	Catholic	Protestant*	Orthodox	Jewish	Islamic	Hindu	Sikh	Buddhist	Religion
Canada	47.3	41.2	1.5	1.2	0.4	0.3	0.3	0.2	7.3
BC	19.8	54.7	0.9	0.5	0.5	0.3	1.5	0.4	20.5
Alta	27.7	56.0	2.2	0.5	0.8	0.3	0.3	0.3	11.5
Sask	32.4	58.3	2.4	0.2	0.1	0.1	**	0.1	6.2
Man	31.5	56.6	2.1	1.5	0.2	0.2	0.2	0.2	7.3
Ont	35.6	51.8	2.0	1.7	0.6	0.5	0.2	0.2	7.1
Qué	88.2	6.4	1.2	1.6	0.2	0.1	**	0.2	2.1
NB	53.9	42.9	0.1	0.1	**	0.1	**	**	2.8
NS	37.0	58.0	0.3	0.2	0.1	0.1	**	0.1	4.0
PEI	46.6	50.5	**	0.1	0.1	0.1	**	**	2.6
Nfld	36.3	62.6	**	**	**	0.1	**	**	1.0
NWT	40.3	52.0	0.4	**	**	**	**	**	6.4
YT	24.2	53.3	0.1	0.1	**	**	0.2	0.3	19.5

\* Includes Anglicans

\*\* Below 0.05% of region's population

1) Hamelin, J. and Nicole Gagnon, *Histoire du catholicisme québécois*. Tome I. Boréal Express, 1984:41-49.

2) *The Canadian Encyclopedia*, Vol. I, Edmonton: Hurtling Publishers, 1985 : 304.

描写されてきたが、それを端的に表現すれば、「革命以前 (ancient régime) のフランス社会」というのが当たるかもしれない。トロント大学国際問題研究所の Sylvia Ostry はケベック人がアフリカーナに似ているとして、次のようにいう；

remote from their forebears, they missed out on the enlightenment in Europe, took refuge in an isolated culture and left business to the English-speakers with whom they reluctantly shared their outpost.<sup>3)</sup>

### ＜静かなる革命＞の展開

＜静かなる革命＞によって近代化と民主化の嵐がケベック社会を席卷したが、その政治的・経済的ナショナリズムとは別に、それはこの社会に大きな社会変動を惹起した。その淵源は、一方では州政府による制度改革であったが、他方では人々の価値観やものの考え方が変わったために彼らの社会的行動が大きく様変わりしたことによる。ここでは、若干その社会学的な側面について検討してみたい。

まず、＜静かなる革命＞を用意した社会的条件がある。すなわち、ケベック社会ではすでに1961年に人口の80%以上が都市に住み、農業労働人口は7.6%、それに対して51.5%が第3次産業部門で働いていた。その上、失業率も14-15%と高く、教会の勢力も徐々に衰えつつあったのである。伝統的な＜防衛的-農村的ナショナリズム＞を拒否した知識人、ブルジョワ、市民達は *Cité Libre* の思想を実現すべくこの革命の積極的な支持者となった。また、女性の解放と地位の向上がドラスティックに展開したのもこの時期であったことをつけ加えておこう。社会的に目覚めた彼女達は、避妊や妊娠中絶の立法化のみならず、カナダの＜非核化＞運動にも積極的に参加したのである。<sup>4)</sup>

教育について言えば、それまで教会が握っていたこの分野を掌握するため、州政府は1964年に文部省を設置し、教育(内容)の近代化に取り組んだ。CEGEPS (Centres d'Enseignement Général et Professionnel) が創設され、大学が拡大され

＜世俗化＞されて、近代化・産業化に必要な人材の供給が可能になった。

女性解放との関連で法律の面を見てみると、1969年に施行されることになる A Matrimonial Causes Act が重要で、これによって結婚における女性の権利が増大し、また離婚手続きが容易になったのであった。

かくして、カトリック教会は往年の力を失った。フィッツモリスは書いている；

Another major change in Québec society over this period was the rapid decline in the influence of the Roman Catholic Church which, since the failure of the Parti des Patriotes in 1838, had been the dominant force in society. The Church's power seemed to collapse almost without resistance, apart from the opposition to the educational reforms led by the Associations de Parents Catholiques and the *Berets Blancs*, a uniformed youth organisation. The Church itself was at a crossroads, and therefore found difficulty in reacting to the explosion of new secular forces. The Cardinals of Montréal and Québec were heavily engaged in the Second Vatican Council of 1960-5, and many Québec Catholics were attracted by the reform movement within the Church. The chairman of the Royal Commission on Education - so strenuously opposed by the Church - was a Catholic priest (Mgr Parent). The Church was forced to recognise that Québec society had become 'pluralist and secularised', and in the resulting confusion it could no longer exercise moral leadership. The Papal Encyclical on contraception, *Humanae Vitae* (1969), was also a strong factor in undermining Catholic influence. As a result, the proportion of Catholics actively practising their religion fell from 60 to 30% between 1960 and

3) *The Economist*. June 29, 1991: 3-17.

4) Fitzmaurice, J. 1985. *Quebec and Canada: past, present and future*. N. Y.: St. Martin's Press: 55.

1970, and for those under twenty-four it fell to 12%. Many hundreds of priests left the Church and vocations slumped. The Church thus had an ageing membership. (Fitzmaurice, J. op. cit.; 59-60)

＜静かなる革命＞の評価は、それが社会の全領域にわたるため、そのそれぞれで一定の判断がありえよう。左翼の日からは、プチブル的な改革以上のものではあり得なかったかもしれない。けれども、全体としてみればそれが伝統的・保守的なそれまでのケベック社会を近代的で民主的な社会に転換するものであったことは疑問の余地がない。それはまた、世俗的な権力（州政府）による「上から」の社会主義的・集合主義的な社会改革という方法で実行された。その重要な帰結の一つがケベック社会の世俗化であったというわけである。

### 近代化と世俗化

近代化が進展すると世俗化が進むと、一応は考えられている。ここで「一応は」というのは、通常、近代化の展開とともに勢力を失うのは既存の宗教教団であって、これに対してしばしば新しい宗教の台頭が見られることが少なくないからである。さて、世俗化とは、宗教の価値・規範領域における指導力が低下することであるが、経験的には、宗教的態度や実践（例えば、教会の礼拝に出席するなど）を調査・測定することで実証できるとされる。世俗化を押し進める＜外的＞な要因としては、1) 科学の隆盛、2) 資本主義・物質主義の伸展、3) 世俗国家（権力）の台頭、4) 宗教以外の道徳的イデオロギーとの競争、などが考えられるが、他方宗教内部から自由主義的な運動が起こることにもよる。（cf. Dietrich Bonhoeffer）ケベックの場合で言えば、＜静かなる革命＞はこれらの外的要因を生みだしたし、これに呼応するかのように教会内部でもケベック社会の多様性と世俗化を認める動きが、特に第2回ヴァチカン会議（1960-65年）の后台留言してくるのである。そ

の上、ケベック社会においても、さまざまな新宗教運動が出現してくる。

一般的にいうと、宗教が公共的な＜制度＞（従って、宗教的信仰や実践が集行的に行われる）から＜私的＞な領域に後退する。そのため、宗教（ケベック社会で言えばカトリック教会）が社会の集成的な生活に於ける道徳的・倫理的指導原理としての役割を著しく弱めるのである。教会の教えが、新しい社会—政治的実践への要請と価値葛藤を引き起こすからである。そこで、人々が自分の生活様式に適合的な新宗教を求め始めるのだという仮説も存在する。

人々の価値観一般の話になると、伝統的な価値が衰退して物質的な価値観が広がると同時に、個人主義が勢力を広げ、価値の多様化も伸展する。こうした事柄については、多くの意識調査や世論調査の結果が報告されているが、それらのなかには、上の事実に加えて、仕事と個人的な生活をより重視する傾向の増大や男女間の平等に対する意識の高まりを実証するものも多い。<sup>5)</sup>

精神的価値の衰退と個人主義の隆盛については、以下のような報告がある。

—11の選択肢（繁栄、喜び、友情、独立、精神性、成功、愛、経済的安定、自己実現、利他主義、家族の安全）のなかでくもっとも重要でない＞のパーセントが一番高かったのは、1981年で精神性の31%で、これは1977年と比べて約10%のアップ。くもっとも重要＞は家族の安全で58%、この値は1977年と比べてほとんど変化はない。

—個人主義は制度的にも強く強調されるようになるが、男女格差の是正、家庭内暴力への制度的介入、妊娠中絶の権利保障など、人権への関心が急激に高まった。<sup>6)</sup>

### 人口、結婚、家族、性、そして宗教をめぐる変化

極めて一般的に言えば、近代化・世俗化の進展とともに、出生率が低下し、子供の数が減少して世帯の規模が縮小すると同時に、人口の高齢化が

5) Allaire, Luc. "L'évolution des valeurs au Québec", *Mouvements* 3, no. 1, 1985 : 15-19.

6) *Recent Social Trends in Quebec 1960-1990*. Campus Verlag, McGill-Queen's University Press, 1991 : 586-587.

表3 Rates of Marriage, Divorce, Birth, Death and Natural Increase by Province, 1941-1974

Marriage Rates (per 1,000 population)											
Year	Nfld.	P.E.I.	N.S.	N.B.	Que.	Ont.	Man.	Sask.	Alta.	B.C.	Canada
1941	8.7	7.1	11.4	10.8	9.8	11.4	11.4	7.9	10.6	11.9	10.6
1951	7.0	5.9	7.9	8.5	8.8	9.8	9.5	8.2	9.9	9.7	9.2
1961	7.2	6.0	7.2	7.5	6.8	7.1	7.1	6.6	7.9	6.7	7.0
1971	9.0	8.6	8.7	9.7	8.2	9.0	9.2	8.4	9.6	9.3	8.9
1974	7.9	8.5	8.7	9.2	8.4	9.0	9.1	8.8	9.7	9.1	8.9

Divorce Rates (per 1,000 population)											
Year	Nfld.	P.E.I.	N.S.	N.B.	Que.	Ont.	Man.	Sask.	Alta.	B.C.	Canada
1941	-	1.1	11.8	19.0	1.4	25.1	33.2	16.3	39.1	74.5	21.4
1951	1.1	10.2	29.1	30.2	7.1	45.9	46.5	27.2	62.7	114.9	37.6
1961	1.3	7.6	33.2	32.4	6.6	43.9	33.9	27.1	78.0	85.8	36.0
1971	28.7	54.5	91.4	76.1	86.3	158.5	140.1	88.1	224.6	225.5	137.6
1974	55.5	82.3	195.6	114.1	200.1	188.7	177.6	114.6	288.6	285.6	200.6

Birth Rates (per 1,000 population)											
Year	Nfld.	P.E.I.	N.S.	N.B.	Que.	Ont.	Man.	Sask.	Alta.	B.C.	Canada
1941	27.3	21.6	24.1	26.8	26.8	19.1	20.3	20.6	21.7	18.4	22.4
1951	32.5	27.1	26.6	31.2	29.8	25.0	25.7	26.1	28.8	24.1	27.2
1961	34.1	27.1	26.3	27.7	26.1	25.3	25.3	25.9	29.2	23.7	26.1
1971	24.5	18.8	18.1	19.2	14.8	16.9	18.2	17.3	18.8	16.0	16.8
1974	18.9	16.6	15.9	97.3	14.0	15.3	17.1	16.7	17.4	14.8	15.4

\* Adapted from *Vital Statistics, 1974. Preliminary Annual Report*, Catalogue 84-201. Ottawa: Statistics Canada, 1976.

進み、離婚が増加するなどの現象が現れる。カナダ及びケベックでもこうした事情は変わらず、加えて都市化・産業化によって、都市人口の増加や労働人口の構成比の変化が実現する。しかし、相対的に近代化の進展が遅れていたケベック社会ではこれらの変化が極めて劇的なスピードで展開した。1941-1974年の期間でも、出生率の低下と離婚率の上昇は他の州と比べて特に顕著であり、(前者は半減し、後者は143倍に)、人口の自然増も半減しているのである。(表3) 実際、ケベック社会の粗出生率(生存出生/人口1,000)は1936年まではカナダで最高であったが、その後着実に低下して、1968年に最低になり、1974年には14ポイント(14/1,000)を記録したのであった。<sup>7)</sup>

さて、出生率の低下に関しては、避妊の効果的な手段の開発と普及、それにこれを容認ないし肯定する法律や道徳的世論の確立が重要だと考えら

れているが、併せて育児の経済的効果の減少(コストの割に利潤が少ない)やライフスタイルの個人主義化、さらには子供観・親子観・家族観の変化がこれに関係すると思われる。同様に、離婚率の上昇についても、法的措置や女性の経済的進出、またその人権に対する認識の深まりが「必要条件」を構成することはいうまでもない。そのすべてをここで検討することは出来ないが、以下にいくつかの点に絞って考察してみたい。

#### 1) 出生率の低下と子供の数の減少

出生率の低下は、近代化の進展とともに広く観察される現象で、カナダも例外ではなく、1951年には27.2であった粗出生率が1981年には15.3まで落ち、その人口再生産率(女性一人当たり一生に生むであろう女の子の数)は0.829と史上最低を記録している。(表4) このことを反映して、15才

7) Kalback, W. E. and et als. *The Demographic Bases of Canadian Society*. Second ed., Toronto: McGraw-Hill, 1979: 121.

表4 Selected Measures<sup>1</sup> of Mortality and Fertility: Canada, 1921-1981  
(Source: Statistics Canada, Vital Statistics, 1977 and 1981)

Year	Crude Death Rate	Infant Mortality Rate	Crude Birth Rate	Gross Reproduction Rate
1921	10.6	88.1	29.3	1.712
1931	10.1	84.7	23.2	1.555
1941	10.0	59.7	22.4	1.377
1946	9.4	46.7	27.2	1.640
1951	9.0	38.5	27.2	1.701
1956	8.2	31.9	28.0	1.874
1961	7.7	27.2	26.1	1.868
1966	7.5	23.1	19.4	1.369
1971	7.3	17.5	16.8	1.060
1976	7.3	13.5	15.7	0.887
1981	7.0	9.6	15.3	0.829

<sup>1</sup>Selected measures of mortality and fertility:

*Crude Death Rate:* The number of deaths per 1000 population in a given year

*Infant Mortality Rate:* The number of deaths to Infants under 1 year of age per 1000 live births in a given year

*Crude Birth Rate:* The number of live births per 1000 population in a given year

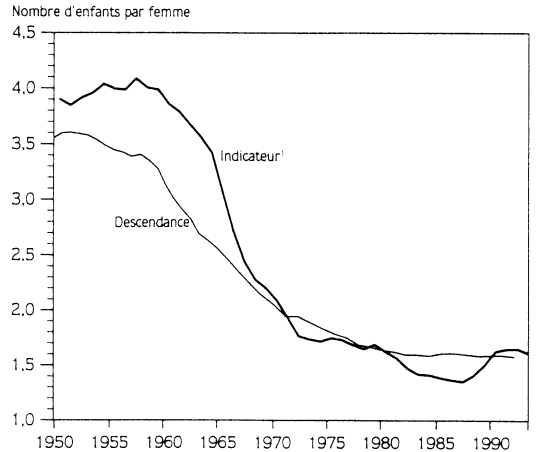
*Gross Reproduction Rate:* The average number of daughters that would be born to a woman during her lifetime if she passed through her child-bearing years conforming to the age-specific fertility rates of a given year

表5 Selected Population Characteristics: Canada, 1901-1981  
(Source: Statistics Canada, 1971 and 1981 Censuses of Canada; and Dominion Bureau of Statistics, Censuses of Canada, 1901 to 1961)

Year	Males per 100 Females	Average Age (Median)	Percent under 15 Years	Percent 65 Years and over	Percent Population Foreign-born
1901	105	22.7	34.6	5.0	13.0
1911	113	23.8	33.1	4.5	22.0
1921	106	23.9	34.5	4.7	22.3
1931	107	24.7	31.7	5.5	22.2
1941	105	27.0	27.8	6.7	17.5
1951	102	27.8	30.4	7.7	14.7
1961	102	26.5	34.0	7.6	15.6
1971	100	26.4	29.5	8.1	15.3
1981	98	29.6	22.5	9.8	16.1

以下の人口比は今世紀にはいと漸次減少し、1981年には22.5%となった。(表5)そして、すでにみたように、ケベックではこの現象が劇的に展

表6 Indice synthétique de fécondité et descendance des générations, Québec, 1950-1993



1. La descendance est décalée de l'âge moyen à la maternité.  
Source: Bureau de la statistique du Québec.

開したわけである。(表6) 一般的には、この原因は、一方では女性の諸権利の拡大、社会参加の増大、社会全体の個人主義化など、他方では効果的で安全な避妊法や妊娠中絶の普及であるとされるが、この事情はケベックでも観察される。西ドイツとの比較でこの問題を論じた *L'actualité* (Juillet, 1987: 34) は、最近の世論調査の結果をひきながら、ケベックではこのところ「子供を持つ」ことが人生の中心的な関心事ではなくなりつつあるという。この調査では、ケベック人の人生における最大の関心事は「愛情を交換できる幸福で平和な "une vie de couple"」であり、「子供を持つ」ことは第3位であるという。しかし、このような急激な子供の数の減少は民族を滅亡に導くものだという危機感が広がり始めてもいる。実際、この調査でも、46%のケベック人が「子供を欲している夫婦に州政府が何らかの奨励策を実施できるように税金をあげることに反対しない」といい、この割合は25-35才で51%、18-24才の若年層では70%にも達するのである。この記事では、また、政府の中にく家族と移民の政策に関する独立の省庁を設立すべきであるというモントリオール大学の15人の人口学者の勧告にも触れている。もちろん、この危機に対してケベック政府がただ何もしないで手をこまねいているというわけではない。ただ、政府の政策は直接的に出生率を上げる

方向ではなく、人々が子供を育て易いような環境を整備すること（育児所の増設、育児休暇の延長、勤務時間や商店の開店時間の柔軟化、それに子供手当とか保育費援助とか）にあるようである。（op.cit. :40.）

## 2) 離婚率の上昇

離婚の増加についても、出生率の低下の場合と同様な社会学的背景が存在するが、ここでもケベックでの変化が劇的である。（表7）すでに示したように、ケベックでは1941年、人口10万当たりの離婚数が1.4であったものが、1974年には200.1に跳ね上がったのである。周知の通り、ケベック社会では伝統的に夫が妻や子供に対して絶対的な権力を持っていたが、1982年の民法改正で夫婦の

完全な平等が認められるようになった。また、家族生活が教会の権威から解放されるとともに、それまで不可能であった離婚や別居がより容易になった。同時に、これと平行して、不倫や私生児に対する人々の態度も寛容になったとされる。たとえば、カナダとアメリカ合衆国を比較している政治学者リブセットによれば、<sup>8)</sup> さまざまな最近の世論調査の結果から、宗教的信仰に関していえば、一番信仰心の篤いのはアメリカ人、次いでアングロ系のカナダ人、一番信仰心の弱いのはフランス系のカナダ人である。そしてこの事実はその行動にも見事に反映されているという。The CARA-Gallupのデータによると、たとえば、「結婚は時代遅れの制度である」というステートメントに対して19%のフランス系カナダ人が賛意を表明したが、これに賛同するものの割合はアングロ系カナダ人では11%、アメリカ人では7%であった。同様に、「女性が一人で子供を持ちたいと思うが、（その）男性とは安定的な関係を持ちたいとは考えない」というステートメントに対する不賛成の割合は、アメリカ人では58%、アングロ系カナダ人では53%、そしてフランス系カナダ人では34%であった。<sup>9)</sup> こうした一連のデータが示していることは、1960年代末から1970年代にかけてケベック人がその信仰と性行動において、著しく世俗化の方向に自己転換したということである。

表7 Nombre de divorces et indice synthétique de divortialité, Québec, 1969-1992

Année	Divorces	Indice synthétique
	n	pour 100 mariages
1969	2,947	8.8
1970	4,865	14.0
1971	5,203	14.6
1972	6,426	17.5
1973	8,091	21.5
1974	12,272	32.1
1975	14,093	36.1
1976	15,186	37.8
1977	14,501	35.2
1978	14,865	35.1
1979	14,379	33.2
1980	13,899	31.7
1981	19,193	43.5
1982	18,579	40.8
1983	17,365	39.3
1984	16,845	37.9
1985	15,814	35.8
1986	19,026	43.5
1987	22,098	46.1
1988	20,340	47.8
1989	19,829	47.3
1990	20,474	49.6
1991	20,277	49.6
1992	19,695	49.2

Sources : Statistique Canada.  
Bureau de la statistique du Québec.

## おわりに

本稿では、世俗化を独立変数にして、ケベック社会の諸変化、なかんずく少子化を説明しようとした。しかし、世俗化はまた、近代化というもっと大きな歴史的変動の一部分であるから、そうした背景についてもいささか留意を促したつもりである。さらに言えば、この社会変動は、高度産業社会カナダの一般的な特徴でもあり、その点でケベックだけが例外的であった訳ではない。世俗化の進展は、カナダ全体でみても、都市化、高学歴化、高収入化などと高い相関を示している。1987年の週刊誌マックリーンの調査では（*Maclean's*, January 5, 1987）、カナダ人が人生

8) Lipset, S. M. *Continental Divide*, Routledge, 1990.

9) op. cit.: 84-87.

表8 Number and Percentage of Births out of Wedlock, Québec, 1961-1988

Year	Number	%	Year	Number	%
1961	5,138	3.7	1975	8,504	8.8
1962	5,429	3.9	1976	9,561	9.8
1963	5,882	4.3	1977	10,198	10.5
1964	6,227	4.7	1978	10,815	11.2
1965	6,481	5.2	1979	12,599	12.6
1966	6,620	5.9	1980	13,488	13.8
1967	7,043	6.7	1981	14,816	15.6
1968	7,405	7.4	1982	16,498	18.2
1969	7,676	7.7	1983	17,865	20.4
1970	7,671	8.2	1984	19,609	22.4
1971	7,671	8.2	1985	21,248	24.7
1972	6,751	7.7	1986	22,979	27.2
1973	6,771	7.6	1987	25,019	29.9
1974	7,009	7.6	1988	28,505	33.1

Source : Louis Duchesno, *La situation démographique au Québec*, Québec, Bureau de la statistique du Québec and Les Publications du Québec, Editions 1988 and 1989.

で大切だと思うものは、第1位が家族で77%、第2位が仕事で17%、そして第3位が宗教でわずかに5%であった。しかも、その家族は平等な夫婦を中心にした新しい家族であって、家族外に仕事を持つ妻が増加すると同時に、子供の数も減少してきている。実際、1986年には子供のいない家族の割合は31%であり、5人以上子供のいる家族は1961年の13.6%から1986年には0.7%に減少しているのである。もう一つ興味深い事実は、(結)婚外出生の増加であり、これは1961年の3.7%から1988年には33.1%に、(表8)さらに1993年には46%にも増加している。このことは、人々が今でも強く指向している「家族」の中味が過去のそれとは大いに異なることを示唆していよう。最後に、少子化の背景でもあり、教会(カトリック)的道徳の弱体化を意味している妊娠中絶や墮胎について述べておこう。すなわち、ここでもまた、その数は、表9が示す通り、きわめて着実に増加しているのである。

ケベック社会の世俗化はまた、ローマカトリック教会の組織の弱体化としても現れているので、若干の数字を示しておこう。1966年以来、ケベックでは教会関係者の数が約3分の1減少したという。すなわち1969年には48,361人だったものが1988年には32,104人に減少したが、この減り方は

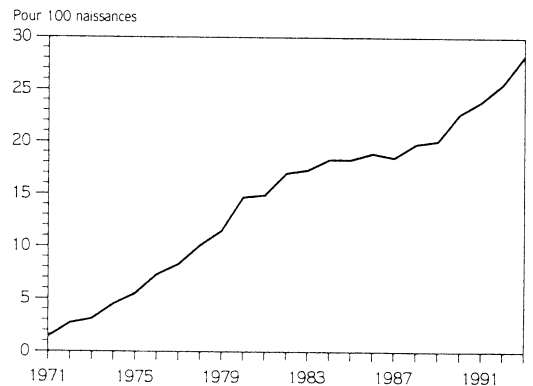
表9-1 Nombre d'interruptions volontaires de grossesse, rapport pour 100 naissances vivantes et indice synthétique, Québec, 1981-1993'

Année	Interruptions volontaires de grossesse <sup>2</sup>	Rapport pour 100 naissances vivantes	Indice synthétique
	n		
1981	14,193	14.9	0.238
1982	15,385	17.0	0.259
1983	15,200	17.3	0.257
1984	16,004	18.3	0.272
1985	15,702	18.3	0.269
1986	15,971	18.9	0.275
1987	15,475	18.5	0.269
1988	17,068	19.8	0.301
1989	18,411	20.1	0.328
1990	22,219	22.7	0.399
1991	23,261	23.9	0.424
1992	24,619	25.6	0.453
1993	26,106	28.3	0.486

1. Les séries plus longues sont présentées au tableau 417. en annexe.
2. Nombre d'interruptions volontaires de grossesse pratiquées par l'ensemble des médecins dans le cadre de l'assurance-maladie (rémunération à l'acte). Il s'agit du rôle 1 seulement (intervention principale). Les stérilisations avec avortement sont comprises depuis 1988 sous le code 6451 utilisé par les médecins spécialistes.

Source : Régie de l'assurance-maladie du Québec.

表9-2 Interruptions volontaires de grossesse pour 100 naissances, Québec, 1971-1993



Source : Tableau 417.

1966年を100として1988年には67と下落したことを意味している。(表10)これは、ケベックの人口増を考慮すれば、もっと大きな教会勢力の減少であり、同時にその中味については著しい高齢化も



表10 Religious Staff, Roman Catholic Church, in Number and Index (1966=100), Québec, 1966-1988

Year	Priests		Monks		Nuns		Total	
	N	Index	N	Index	N	Index	N	Index
1966	8,758	100	4,851	100	34,571	100	48,180	100
1968	8,720	100	4,947	102	34,132	99	47,799	99
1969	8,903	102	4,489	93	34,969	101	48,361	100
1970	8,589	98	4,405	91	32,102	93	45,096	94
1973	8,183	93	3,861	80	20,676	89	42,720	89
1974	8,334	95	3,663	76	29,255	85	41,252	86
1976	8,149	93	3,677	76	29,471	85	41,297	86
1977	7,882	90	3,401	70	27,968	81	39,251	82
1978	7,481	85	3,640	75	28,295	82	39,416	82
1979	7,450	85	3,600	74	27,356	79	38,406	80
1980	7,316	84	3,497	72	26,533	77	37,346	78
1981	7,311	83	3,305	68	26,493	77	37,109	77
1982	7,103	81	2,746	57	25,762	75	35,611	74
1983	6,762	77	3,220	66	24,713	71	34,695	72
1984	6,650	76	2,856	59	24,515	71	34,021	71
1985	6,603	75	2,896	60	23,898	69	33,397	69
1986	6,567	75	3,014	62	24,196	70	33,777	70
1987	6,504	74	3,259	67	23,043	67	32,806	68
1988	6,428	73	3,151	65	22,525	65	32,104	67

Source : Canadian Conference of Catholic Bishops, *Yearbook*, Ottawa, 1966 to 1989 editions.

指摘されているのである。こうして、教会の<新しい状況への適応>とは、結局、その勢力と影響力の大幅な後退以外のなにもでもなかったということになろう。「静かなる革命」によって、教会はその実質的な活動領域を奪われてしまった。(the clericalization of the health, education, and welfare systems) 1990年代に入って、ケベック社会は新たな(しかし、多分最後の)ナショナリズムの時代に突入したが、教会がもう一度文化的・政治的独立を目指して往年の力強い役割を引き受けるであろうと考える人はほとんどいない、と *National Catholic Register* (Feb. 17, 1991) は報じている。ケベック社会に於けるカトリック教会の支配は終わったと言っていい。しかし、その意味での世俗化が新宗教の族生を惹起していることもここで付言しておかねばならない。その原因を問うことは、ひとりケベック社会の問題であるばかりではなく、今日高度産業社会といわれる諸社会に共通して見られる<現代人の不安>を考えることでもあるのだ。現代の<神話的思考>は、ケベック社会ではどのような形で現れるのであろうか。

## Quebec Today—secularization and decreasing number of children—

## ABSTRACT

The purpose of this paper is, among other things, to examine contemporary Quebec society that has experienced dramatic social changes since the “Quiet Revolution” in the early 1960s. I would focus upon two important trends; ‘secularization’ and ‘decreasing number of children.’ As widely known, Quebec society had been dominated by Roman Catholic Church whose teachings were the leading principles for Quebecers in everyday life. Simultaneously, their commitment to the Church made up the core of Quebec nationalism. Although it cannot be denied that the Church hindered the process of modernization in Quebec society, the latter would not have survived as a social entity if the Church had not existed. In 1960, Mr. Lesage of the Liberal Party of Quebec came to power in its provincial administration. He began to ‘modernize’ Quebec society from the ‘above.’ Since then, the consecutive provincial governments (the secular powers) have been following the same line of reforms to enhance the modernization of Quebec. Concretely, they deprived the Catholic Church of its traditionally endowed privileges, particularly its monopolistic power and influence in the domain of education, social work, and medical care. This resulted in the alienation of Quebecers from the Church. Freed from the values, norms, and morals based on catholic doctrines, they came to behave differently from they did before. As a result, the social structures in Quebec, including family and community, changed remarkably.

As widely recognized, one reason the French Quebec society succeeded in surviving in the Anglo-dominated North American Continent was its high reproductive capacity. While the surrounding societies maintained and increased their population by means of immigration, Quebec society did this solely through its own indigenous reproduction. (“The revenge from the cradle”) The key for Quebec’s ‘survival’ was its extraordinarily high birth rate. Modernization (or secularization), however, brought to Quebec an extraordinarily low birth rate. The resulting relative decline of population evoked the fear of ‘extinction’ of the Quebec nation for Quebecers. Thus, the population problem became closely tied with politics (Quebec nationalism).

**Key Words** : Quebec, secularization, family